

山下文雄（久留米大学教授）監訳

発達の視点からみた障害児の療育

第2巻 障害児の心理的、社会的問題と教育

井田範美（筑波大学助教授）

本書は西独・ミュンヘン小児センターのヘルブルッゲ教授とその共同研究者による障害児の心理的、社会的問題と教育に対する学際的研究の成果をマニュアル風にまとめた内容になっている。

我国における障害児教育の各種研究会の講師及び日本特殊教育学会のシンポジストとして参加したこともあるヘルブルッゲ教授らは社会小児科学の分野を中心とする障害児教育の学際的アプローチに精力に取り組んできた。

たとえば、医学的には社会的要因を視角とする障害児問題のアプローチ、心理学的には行動療法の導入、教育学的にはモンテッソーリ治療教育学の適用、さらには社会福祉の方法の駆使、等々、オーソドックスな研究アプローチの枠組を打破して、障害児とその家庭の問題解決に取り組んできた。本書は、そうした学際的実践科学としてのミュンヘン小児センター・グループの研究の経過的報告の性格をもっており、他に類書を見ない。

本書の内容を以下、簡単に紹介する。

「Ⅰ. 障害児の心理診断」では、

障害児の心理診断に適用される従来のテストにおけるチェックされていない内容、社会的要因が配慮されないテスト内容の不備性が指摘されるとともに、診断ならびに測定、観察法に対しての知見などが紹介されている。

「Ⅱ. 診断、治療上の問題としての聴力・言語・発語障害」では、各障害児の言語・発話の早期診断法ならびに言語・発話の治療と開発にふれている。言語が他の能力と無関係ではなく、全体的な発達のなかで開発されるものであること、そして、それに及ぼす諸要因を捉え、かつその対応について述べられている。

「Ⅲ. モンテッソーリ治療教育学」では、障害児に対するモンテッソーリ教具の実践的適応とモンテッソーリ・システムによる統合教育が紹介されている。又、モンテッソーリの個別治療及び集団治療の実状が述べられている。ヘルブルッゲ教授らの指導によるモンテッソーリ統合治療教育は異色であり、モンテッソーリ障害児教育の先駆性を荷っているといえよう。

「Ⅳ. 家庭・養護ホームにおける社会的問題と社会的援助」では、従

来のファミリーケースワークとしての社会福祉の方法から一歩踏み出して、社会小児科学を背景としつつ、行動療法を導入した形での心理社会的アプローチが紹介されている。

以上、本書の内容はユニークかつ示唆的である。学際的アプローチによる障害児問題の実践的効果こそ、現場人の現実的ニーズに応えるものである。学際的アプローチは、立場の主体性を見失っては危険であるが、立場にこだわりをもっていることも不可能である。たとえば、モンテッソーリ・メソッドと行動療法とは基本的立場を異にしており、両者の適用は一見矛盾しているように思われる。

しかし、ミュンヘン小児センターでは最新の科学情報をダイナミックに適用し、その試行成果を世に問うているように思われる。

本書は、西独の障害児研究の情報を得るためにも、又、実践者、臨床者のニーズに応えるかのように、解説的にわかりやすく内容の紹介がなされており、障害児問題の関係者にとって必読の書として推薦できる。

最後に、本書に敢えて注文をつけるならば内容が多岐にわたり、説明にやや物足りなさを感じる部分があるが、今後の研究の成果として他書で深及されることを期待したい。

（B5，頁200，1983，¥5,600，
〒300，医学書院 刊）